

といった概念がもちうる思想的・イデオロギー的含意に十分に敏感であることが、その「経験的」使用のための欠くべからざる条件となるだろう。

## 魔女とバロック

黒川 正剛

十六世紀後半から十七世紀にかけて西ヨーロッパでは魔女狩りが猛威を振るった。この時代は美術様式の歴史で言うところとバロックの時代と重なる。バロックとは「十六世紀晩期から十七世紀末までのヨーロッパにみられた、綺想をもとめる願望に支配された芸術的倒錯」であり(ベネデット・クローチエ)、「文明の一般的概念」としても使用される語である。

誇張・過度・移り気なものを特徴とするバロックの淵源は、カトリックによる反宗教改革にある。プロテスタントが聖書と信仰のみによる「合理的な」神の理解を目指したのに対し、カトリックは視覚イメージ(聖画像)を利用し、理性よりも感情に訴え信仰心を高揚させることに努めた。またトリエント公会議(一五四五―一五六三年)では、「聖体への信仰」とりわけ「聖体における主の現存」への信仰が強調され、聖体は教会の中心にある祭壇に置かれることとなった。高価な聖体顯示台が使用され、軍隊の閲兵を伴う聖体行列が盛大に行われることもあった。ミサ時の聖体顯示は、聖体拝領を重視するイエズス会の奨励により一般に普及した。聖母マリアと聖人に対する崇敬も盛んであった。

このようなバロックの宗教性と魔女信仰は関連性をもっている。

たとえばドイツ・バロックの揺籃の地は現在のバーデン・ヴュルテンベルク州、バイエルン州がある南ドイツであり、この地域で全ドイツの魔女処刑数の三分の一以上にあたる九千人が処刑された。具体的な例としてバイエルン州の都市ヴュルツブルクが挙げられる。十六世紀後半から十七世紀初めにかけて当市を支配した領主司教ユリウス・エヒター・フォン・メスブルンはプロテスタントから都市を奪回し、イエズス会と協力してカトリック政策を進めた人物である。彼は熱烈な聖母マリア信仰をもち、聖職者への厳格な独身強制を行うとともに、自分の名を冠した慈善施設を建設し精神病者・孤児・巡礼者に恵みの手を差し伸べた。しかし大規模な魔女狩りを実施したのも彼であった。治世最晩年に三百人の魔女を処刑している。彼はまた、ヴュルツブルクを南ドイツのバロック都市の中でも最も美しい都市の一つにした張本人でもあった。

もう一つの具体例として十七世紀初めのフランス・バスク地方で行われた魔女狩りを題材にした悪魔学論文『墮天使および悪魔の無節操の図』(一六二二年)が挙げられる。一六〇九年フランス国王アンリ四世の命を受けて、バスク地方の魔女狩りを行ったのはボルドー高等法院評定官ピエール・ド・ランクルという人物である。僅か四ヵ月の間に六百人の魔女を裁いたとも言われ、その経験をもとに執筆されたのが先の悪魔学論文である。ド・ランクルはイエズス会で学んだあと大学で法学博士号を得、高等法院に職を得た。信仰心の厚いカトリック教徒にして新興階層の法服貴族であった。奇しくも祖先はバスク人であり、彼は法服貴族としてフランス絶対主義国家と自己を同一

視しつつ、辺境の地＝魔女の巢窟であるバスク地方の人々を裁いたことになる。『墮天使』の中で描写されている魔女のサバトの光景では「聖体奉挙」が度々言及される。黒色の聖体を冒瀆し悪魔崇拜を行うという魔女の行為は、聖体を崇め、神を崇拜するバロックの宗教的特色の明白な転倒である。また論文名中の「無節操」は、悪魔の無節操＝移り気を意味しており、これもバロックの特色である。また一六一三年に再版された『墮天使』にはヤン・ジアルンコ作の魔女のサバトの版画が挿入されている。ポーランド出身のジアルンコはパリで長く制作活動をした画家であり、バロック美術を享受していたことは間違いない。流動感・技巧・装飾・綺想・グロテスクといったバロック美術の諸特徴が、ジアルンコの版画にも見て取ることができる。バロックというヨーロッパの一大思潮は魔女狩りと深く関係しているのである。

### 『魔女への鉄槌』に見る悪魔像の構成

野村 仁子

魔女裁判において、魔女と悪魔との契約という概念は大きな役割を果たした。というのも、魔女が悪事を成したという証拠や証言がなくとも、悪魔と契約したという証拠(例えばアザやほくろなどがそうだとされた)さえあれば、魔女として裁くことができたからである。では、魔女と契約を結んだ悪魔とは一体どのような存在であったのだろうか。本発表では、魔女裁判という狂乱の元凶だとされてきた『魔女への鉄槌』(*Malleus maleficarum*, 1487)において悪魔がどのように定義されているのかを考察する。

るのかを考察する。

まず、キリスト教教義の根幹を成す、旧・新約聖書において悪魔がどのように描かれているのか概観する。旧約聖書において、悪魔は神の使いとしてや、異教の神々として描かれている。新約聖書においては、悪魔は天から落ちた者であり、悪事を行う者として描かれている。しかし、魔女裁判期のような恐怖そのものというイメージはあまり見受けられない。

次に『鉄槌』第一部において見出すことができる三つの悪魔観、①聖書などの伝統に基づいた悪魔観、②『鉄槌』において独自の悪魔観、③異教の神や民間信仰における悪魔観についてそれぞれ考察する。

#### ①聖書などの伝統に基づいた悪魔観

『ヨブ記』など引用をもとに、悪魔は地上で悪事を行い、それは神のうちにあることを証明している。また、トマス・アクイナスからの引用でもって、悪魔は天から落ちた墮天使であることや、人間にはない力を備えていることが確認されている。

#### ②独自の悪魔観

『鉄槌』では、悪魔の罪は魔女の罪より重いということが述べられている。これは、『鉄槌』の著者たちが新たに考え出した悪魔観であり、この著作が、魔女の処刑を目的に書かれたため故のものであると考えられる。

#### ③異教の神や民間信仰における悪魔観

墮天使である悪魔に関する記述以上に、インクブスやスクブスといった悪魔や、悪魔が姿を変えたものとされていた異教の神々についての記述が多く見られる。これは、アウグスティ